

白雪姫はなぐられて生き返った

— グリム童話 初版と第二版の比較 —

間宮史子

小澤昔ばなし研究所

かえるの王さま、または鉄のハイシリヒ 8

マリアの子 19

十二人の兄弟 33

兄と妹 50

森の三人のこびと 69

白いへび 87

ゆうかなな小さい仕立て屋さん 97

灰かぶり 124

ホレばあさん 156

七羽のからす 166

手を切られたむすめ 175

テーブルよ食事のしたく、金ひりろば、こん棒よ袋からとびだせ 195

こびとのビヒテルマン 221

名づけ親になった死神 226

おやゆび小僧の旅修業 236

フィッチャーの鳥 251

いばら姫 262

つぐみひげの王さま 272

白雪姫 287

ルンペルシユテイルツヒエン 315

いとしいローラント 324

金色の子どもたち 337

金のがちよう 355

千まい皮 369

星の銀貨 388

むかしむかし、ある冬のさなかのこと、雪が鳥の羽のように空からふついているとき、美しい女王さまが黒い黒檀の窓わくのある窓辺にすわって縫い物をしていました。縫い物をしながら雪のほうを見たとき、針を指に刺して、血が三滴雪のなかへ落ちました。まっ白い雪のなかの赤い血が、とても美しかったので、女王はこう思いました。この雪のように白く、この血のように赤く、この窓わくのように黒い子どもがいたらいいのに。

そして、それからまもなく、女王は、女の子をうみました。その子は、雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒かったので、白雪姫と名づけられました。

むかしむかし、ある冬のさなかのこと、雪が鳥の羽のように空からふついているとき、女王さまが黒い黒檀の窓わくのある窓辺にすわって縫い物をしていました。縫い物をしながら雪のほうを見たとき、針を指に刺して、血が三滴雪のなかへ落ちました。まっ白い雪のなかの赤い血が、とても美しかったので、女王はこう思いました。

（この雪のように白く、この血のように赤く、この窓わくのように黒い子どもがいたらいいのに！）

それからまもなく、女王は、女の子をうみました。その子は、雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪をしていたので、白雪姫と名づけられました。

子どもが生まれると、女王はすぐに亡くなりました。

女王は、この国でいちばん美しいかたでした。そして、自分の美しさにうぬぼれていました。女王は、鏡をひとつ持っていました。毎朝、その鏡の前に立って、

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しい女はだれ？」

と、たずねると、鏡はいつも、

「女王さま、

この国でいちばん美しいかたはあなたです」

と、いうのでした。すると女王は、この世で自分より美しい人はだれもないことをたしかめられるのでした。

白雪姫はすくすくと成長し、七歳になると、女王をしのぐほど美しくなりました。そして、女王が鏡に、

一年たつと、王さまは、新しいおきさきをもらいました。

おきさきは、美しいかたでした。けれども、自分の美しさにうぬぼれていて、自分より美しい人がいることに、がまんできませんでした。おきさきは、ふしぎな鏡を持っていました。その鏡の前に立って、なかをのぞいて、

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しいのはだれ？」

と、たずねると、鏡は、

「女王さま、

この国でいちばん美しいのはあなたです」

と、答えるのでした。すると、おきさきは満足しました。この鏡はほんとうのことしかいわないことを知っていたからです。

白雪姫はすくすくと成長し、だんだん美しくなりました。七歳になると、その子は、明るい昼ひなかのよ

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しい女はだれ？」

と、たずねると、鏡は、

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。」

けれども、白雪姫は、あなたより千倍も美し

い！」

と、いいました。

女王は、鏡がこういうのをきくと、ねたみのためにまっさおになりました。そして、そのときからというもの、女王は、白雪姫をにくみはじめました。そして、白雪姫を見ると、この子のせいで、自分がもうこの世でいちばん美しい女でなくなってしまうたと思い、心がにくりかえるようでした。女王は、ねたみのためにじっとしていらなくなり、狩人をよびつけていいました。

「あの白雪姫を、森のおくの遠くはなれたところへつれだしておくれ。そこで、刺し殺して、その証拠にあの子の肺と肝臓を持っておいで。わたしは、それを塩で煮て食べるんだ」

狩人は、白雪姫をつれて森へいきました。ところが、狩人が、鹿を切る大きな刀をひきぬいて、ちょうど刺そうとすると、白雪姫は泣きだしました。

そして、どうか命だけは助けてください、森のなかへかけていって、けっしてもどってきませんから、といっしょうけんめいたのみました。

白雪姫があまりに美しいので、狩人はかわいそうに思い、こう考えました。どっちみち、おそろしいけものが、じきに姫を食べてしまうだろう。自分が、姫を殺さなくてすむのは、うれしいことだ。

うに美しくなり、おきさきよりもずっと美しくなりました。おきさきが鏡の前に立って、

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しいのはだれ？」

と、たずねると、鏡は、

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。」

けれども、白雪姫は、あなたより千倍も美しい

と、答えました。

おきさきは、これをきくとおどろき、いかりと、ねたみのためにまっさおになりました。そのときからというものの、白雪姫のすがたを見ると、腹わたがにくりかえる思いでした。おきさきは、それほど白雪姫をにくんでいました。ねたみ心と、高慢さは、ますます大きくなり、おきさきはとうとう、昼も夜もじっとしていらなくなりました。それで、おきさきは狩人をよびつけていいました。

「あの子を、あれた森へつれだしておくれ。わたしは二度とあの子の顔を見たくない。森のなかへいったら、あの子を殺して、その証拠に肺と肝臓を持っておいで」

狩人はおきさきの命令にしたがって、白雪姫を森のなかへつれだしました。狩人が、鹿を切る大きな刀をひきぬいて、白雪姫のきよらかな心臓をつき刺そうとすると、白雪姫は泣きだして、こういいました。

「おねがいです、狩人さん。命だけは助けてください。わたしは、森のなかへかけていって、けっして二度とふたたび帰ってきませんから」

白雪姫があまりに美しいので、狩人はかわいそうに思っていました。

「それじゃ、にげていきな、かわいそうなお姫さま」おそろしいけものが、じきに姫を食べてしまうだろうと、狩人は思いました。それでも、自分から、むすめを殺さなくてすんだので、心に重くのしかかっていた

ちようどそこへ、いのししの子がかけてきたので、それを刺し殺し、肺と肝臓をとりだして、それを証拠として、女王のところへ持ち帰りました。女王は、それを塩ゆでにし、べろりとたいらげて、これで、白雪姫の肺と肝臓を食べてしまったと思いいこんでいました。

白雪姫は、この大きな森のなかで、たったひとりつきりになってしまいました。それで、とても心ほそくなり、かげだしました。とがった石をこえ、いばらをこえて、一日じゆう走りまわりました。とうとう、お日さまがしずむころ、白雪姫は、小さな小屋に着きました。その小屋は、七人のこびとのものでした。けれども、こびとたちは、そのとき鉱山にでかけていて、るすでした。

白雪姫は、小屋のなかへはいりました。なかにあるものを見ると、どれもこれもみんな小さいのですが、かわいらしくて上品でした。そこには、小さなテーブルがあつて、その上には、小さなおさが七枚ならんでいました。おさらのわきには、七つのスプーンと七つのナイフとフォークが置いてあり、グラスも七つありました。そしてかべぎわには、きれいなカバーがかけられたベッドが七つならんでいました。白雪姫は、おなががすいていたし、のどがかわいていたので、どのおさらからもすこしずつ、おかずとパンをとって食べ、どのグラスからも一滴ずつワインを飲みました。そして、とてもつかれていたの、横になってねむろうと思いました。それで白雪姫は、七つのベッドをつぎつぎにためしてみましたが、どのベッドもうまくありません。七つめのベッドだけが、ちようどよかったの、それに横になってねむりました。

石が、落ちたような気がしました。

ちようどそこへ、いのししの子がかけてきたので、それを殺し、肺と肝臓をとりだして、それを証拠として、おきさきのところへ持ち帰りました。おきさきはよろこんで、すぐにそれを塩ゆでにさせ、べろりとたいらげて、これで、白雪姫の肺と肝臓を食べてしまったと思いいこんでいました。

さて、かわいそうに白雪姫は、この大きな森のなかで、たったひとりつきりになってしまいました。とても心ほそく、木ぎの葉っぱを一枚一枚ながめては、これからどうしたら助かるかしらと考えました。白雪姫はかけだしました。とがった石をこえ、いばらをこえて走りに走りました。おそろしいけれどもたちが、白雪姫のわきを走りぬけていきました。けれども、白雪姫にはなんの手だしもありません。白雪姫は足のつづくかぎり走りに走りつづけました。やがて、夕やみがせまるころ、小さな小屋が見えたので、そこにはいって、やすもうと思いました。

その小屋のなかにあるものは、どれもこれもみんな小さいのですが、それはそれはかわいらしくて上品で、とてもことばではいいあらわせないほどでした。そこには、白いテーブルかけのかかったテーブルがあつて、その上には、小さなおさが七枚ならんでいました。どのおさらにも、スプーンがついていて、そのほかに、ナイフとフォークがついていました。グラスも七つありました。かべぎわにはベッドが七つならんでいました。それには、雪のように白いベッドカバーがかけられてありました。白雪姫は、とてもおなががすいていたし、のどがかわいていたので、どのおさらからもすこしずつ、おかずとパンをとって食べ、どのグラスからも一滴ずつワインを飲みました。というのは、ひとつのおさらからだけとって、それをからっぽにしまいたくなかったからです。食べおわると、白雪姫はとてもつかれていたの、ベッドに横になりました。けれども、どのベッドもうまくありません。長すぎたり、短すぎたりしました。最後に七つめのベッドがちようどよかったの、そこに横になつたまま、すべてを神さまにおまかせしてねむりました。

夜になると、七人のこびとが仕事から帰ってきました。そして、七つの小さなあかりをつけると、だれか自分たちの小屋にはいったものがあることに気づきました。

初版
第2版

あたりがすっかり暗くなったころ、この小屋の主人たちが帰ってきました。それは、山のなかで鉱石を掘っている七人のこびとでした。こびとたちは、七つの小さなあかりをつけました。そして、小屋のなかが見えるとなると、だれかこの小屋にはいったものがあることに気づきました。なぜなら、小屋のなかのようすが、朝でていったときとちがっていたからです。

最初のこびとがいました。

「だれか、ほくのいすにすわったやつがいるぞ」

二番めのこびとがいました。

「だれか、ほくのおさらから食べたやつがいるぞ」

三番めのこびとがいました。

「だれか、ほくのパンをちぎって食べたやつがいるぞ」

四番めのこびとがいました。

「だれか、ほくのおかずをとって食べたやつがいるぞ」

五番めのこびとがいました。

「だれか、ほくのフォークで刺して食べたやつがいるぞ」

ぞ」

六番めのこびとがいました。

最初のこびとがいました。
「だれか、ほくのいすにすわったやつがいるぞ」
二番めのこびとがいました。
「だれか、ほくのおさらから食べたやつがいるぞ」
三番めのこびとがいました。
「だれか、ほくのパンをちぎって食べたやつがいるぞ」
四番めのこびとがいました。
「だれか、ほくのおかずをとって食べたやつがいるぞ」
五番めのこびとがいました。
「だれか、ほくのフォークで刺して食べたやつがいるぞ」
六番めのこびとがいました。

二番めのこびとがいました。
「おや、ほくのベッドにも、だれか寝たやつがいる」
そして、七番めのこびとまでみんな、それぞれそういました。

ところが七番めのこびとが、自分のベッドを見ると、そこに白雪姫が横になってねむっているではありませんか。それで、こびとたちはみなかけよってきて、おどろきの声をあげ、七つのあかりをとってきて、白雪姫をつくづくながめました。

初版
第2版

それから、最初のこびとがふりむいてみると、自分のベッドの上に、小さなくぼみがあるのに気づきました。こびとはいいました。
「だれか、ほくのグラスから飲んだやつがいるぞ」
それから、最初のこびとがふりむいてみると、自分のベッドの上に、小さなくぼみがあるのに気づきました。こびとはいいました。
「だれか、ほくのベッドにあがったやつがいるぞ」
それから、最初のこびとがふりむいてみると、自分のベッドの上に、小さなくぼみがあるのに気づきました。こびとはいいました。
「おや！ ほくのベッドにも、だれか寝たやつがいる」
ところが七番めのこびとが、自分のベッドを見ると、そこに白雪姫が横になってねむっているではありませんか。それで、こびとは、仲間をよびました。仲間のこびとたちはみなかけよってきて、おどろきの声をあげ、七つのあかりを持ってきて、白雪姫を照らしてみました。

「こいつは、おどろいた！ こいつは、おどろいた！」
と、こびとたちはさげびました。

「この子はなんて美しいんだろう！」

こびとたちは、その子を見てとてもうれしくなり、起こさずに、そのままベッドに寝かせておきました。七番めのこびとは、仲間のベッドにそれぞれ一時間ずつはいつてねむりました。

そうしているうちに夜が明けました。さて、白雪姫が目をさますと、こびとたちは白雪姫に、きみはだれなの、どうしてぼくらの家へきたんだい、とたずねました。すると、白雪姫はこびとたちに、母親に殺されそうになったこと、けれども、狩人が命だけは助けてくれたこと、そして、一日じゅう走りに走って、とうとう、この小屋にたどり着いたことを話しました。

すると、こびとたちは、かわいそうに思っているまま
した。

「もしきみが、家のなかの用事をひきうけて、料理をしたり、縫い物をしたり、ベッドをととのえたり、洗濯をしたり、編み物をしたりしてくれるなら、そして、家のなかをきちんときれいにしてくれるなら、きみはずっと、ぼくたちのところにいるいいよ。なにも不自由はさせないから。」

夜になると、ぼくらは帰ってくる。そのときには、ごはんの用意ができてなければならぬ。でも昼間は、ぼくらは鉱山にいて金を掘っている。だから、きみはひとりになる。

その女王にだけは注意するんだよ。だれも、うちのな

「こいつは、おどろいた！ こいつは、おどろいた！」
と、こびとたちはさげびました。

「この子はなんて美しいんだろう！」

そして、とてもうれしかったので、その子を起こさず、そのままベッドで寝かせておきました。七番めのこびとは、仲間のベッドにそれぞれ一時間ずつはいつてねむりました。

そうしているうちに夜が明けました。朝になると、白雪姫は目をさました。そして、七人のこびとを見るとおどろきました。けれどもこびとたちは、やさしく、こうたずねました。

「きみの名はなんというの？」

「わたし、白雪姫っていうの」と、むすめが答えました。

「どうして、きみは、ぼくらの家へきたんだい？」

こびとたちはそうききました。すると、白雪姫はこびとたちに、ママ母に殺されそうになったこと、けれども、狩人が命だけは助けてくれたこと、そして、一日じゅう、走りに走って、とうとう、この小屋を見つ

たことを話しました。

こびとたちはいいました。

「もしきみが、料理をしたり、ベッドをととのえたり、洗濯をしたり、縫い物をしたり、編み物をしたりして、家のなかの用事をひきうけ、家のなかをきちんときれいにしてくれるなら、きみはずっと、ぼくたちのところにいるいいよ。なにも不自由はさせないから。」

白雪姫は、こびとたちに、そのとおり約束しました。それからは、白雪姫がうちのなかの仕事をひきうけました。

朝になると、こびとたちは山へ、鉱石や金を掘りにでかけ、夜になると帰ってきました。そのときには、ごはんの用意ができていなければなりません。むすめは昼間、ひとりでいました。

それで、やさしいこびとたちは、白雪姫にこういつて

かにいれてはいけない」

ところで、女王は、自分がまたこの国でいちばん美しい女になったと思って、朝になると、鏡の前についてたずねました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しい女はだれ？」

すると鏡が、また答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、七つの山をこえたむこうにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

女王はこれをきくと、ぎょうてんして、自分がだまされたこと、そして、狩人が白雪姫を殺さなかったことがわかりました。けれども、七つの山には七人のこびとのほかにはだれもないので、女王にはすぐに白雪姫がこびとたちのところへいつて助かったことがわかりました。そこで、なんとかして、その白雪姫を殺せないものかと、あらためてよく考えました。なにしろ、あなたが国じゅうでいちばん美しいかたですと鏡がいわないかぎり、じっとしていられなかったのです。女王にはなにも信じられなかったので、年とつた行商人に変装して、顔に色をぬり、だれにも女王だとわからないようにして、こびとの家の前へいききました。女王は、とびらをたたいていいました。

「あけておくれ、あけておくれ。わたしは、年とつた行商人だよ。いい品を売りにきたよ」

白雪姫は、窓から顔をだしました。

「いったい、なにを売りにきたの？」

注意しました。

「ママ母に注意するんだよ。近いうちに、きみがここにいることがわかるだろうからな。だれも、うちのなかにいれてはいけない」

ところで、おきさきは、白雪姫の肺と肝臓を食べてしまったとばかり思いこんでいたので、自分がまたいちばん美しい女になったと、信じていました。そして、鏡の前についていいました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。」

この国でいちばん美しいのはだれ？」

すると鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、いくつもの山をこえた、

七人のこびとのところにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

これをきいて、おきさきはぎょうてんしました。なぜなら、この鏡は、けっしてうそをいわないことを知っていたからです。狩人にまんまとだまされたこと、白雪姫がまだ生きていることがわかりました。白雪姫が、七つの山をこえた、七人のこびとのところにいるということをきいたので、なんとかして、その白雪姫を殺せないものかと、考えました。なにしろ、自分が国じゅうでいちばん美しいものにならないかぎり、ねたましさで、じっとしていられなかったのです。おきさきは、考えに考えたあげく、顔に色をぬり、年とつた行商人の身なりをして、だれにもわからないようにしました。そういう身なりで、おきさきは七つの山をこえて、こびとの家へいき、とびらをたたいていいました。

「いい品を売りにきたよ！ 買わないかい！」

白雪姫は窓から顔をだして大声でいいました。

「こんにちは、おばあさん。いったいなにを売りにきたの？」

「ひもだよ、むすめさん」と、行商人のおばあさんはいつて、黄色と赤と青の絹で編んであるひもをとりだしました。

「これがほしいかい？」

ええとでも、と白雪姫はいました。そして、こんなに正直な話しかたをするいいおばあさんだもの、きつとうちのなかにいれてもいいわ、と思いました。それで、戸口のかぎをあげ、そのひもを買いました。

「でも、あんたのむすびかたはだらしのないねえ」と、行商人のおばあさんがいいました。

「おいで、一度、ちゃんとむすんであげよう」

白雪姫は、行商人のおばあさんの前に立ちました。すると、行商人はひもをとって、力いっぱいきつくしめたので、白雪姫は、息がでなくなり、死んだようになってたおれてしまいました。

初版
第2版

「よい品だよ、美しい品だよ」と、行商人は答えました。

「いろいろな色のひもだよ」
そういいながら、行商人の女は、色とりどりの絹のひもをとりだして、白雪姫に見せました。こんなに正直な話しかたをするいいおばあさんだもの、うちのなかにいれてもいいわ、と白雪姫は思いました。そして、戸口のかぎをあげ、色とりどりのひもを買いました。

「むすめさん、ちょっと」と、行商人のおばあさんがいいました。

「あんたのむすびかたはひどいねえ！ おいで、一度、ちゃんとむすんであげよう」

白雪姫は、すこしもうたがわず、行商人のおばあさんの前に立って、新しいひもで、むねをしめてもらいました。ところが、年とった行商人が、すばやく、力いっぱいきつくしめたので、白雪姫は、息がでなくなり、死んだようになってたおれてしまいました。

それで、行商人は満足して帰っていきました。それからまもなく夜になると、七人のこびとが帰ってきました。そして、かわいい白雪姫が、まるで死んだように床にたおれているのを見て、ほんとうにびっくりしました。こびとたちは、白雪姫をだきあげてみました。すると、ひもできつくしめられていることがわかったので、ひもを、まっぶたつに切りました。すると、白雪姫は、息をはじめ、それからまた生き返りました。

「それは女王にちがいない」と、こびとたちはいいました。

「女王が、きみの命をうばおうとしたんだ。気をつけるんだよ。もうだれもうちへいれてはいけない」

女王は鏡にたずねました。

初版
第2版

「この美人もこれでおわりさ」と、わるい女はいつて帰っていきました。それからまもなく夕方になると、七人のこびとが帰ってきました。けれども、かわいい白雪姫が床にたおれているのを見て、びっくりしました。白雪姫は、まるで死んだように、すこしも動きません。こびとたちは、白雪姫をだきあげてみました。すると、ひもできつくしめられていることがわかったので、ひもを、まっぶたつに切りました。すると、白雪姫は、かすかに息をはじめ、だんだんに生き返ってきました。

こびとたちは、白雪姫から、きょうのできごとをきくと、いいました。

「その年とった行商人の女は、女王にちがいない。気をつけるんだよ。ほくらがそばにいないときは、だれもうちへいれてはいけない」

わるいおきさきは、お城へ帰ると、鏡の前へいつてきました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。
この国でいちばん美しい女はだれ？」

鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。
けれども、七人のこびとのところにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

女王はぎょうてんして、血がみんな頭にのぼってしまいました。これで、白雪姫がまた生き返ったことがわかったからです。それから、女王は、あのむすめをいったいどうしたものかと、昼も夜も考えました。そして、毒のくしをつくり、この前とはまったくべつのがたに変装して、またでかけていきました。

女王は、戸口をたたきました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。
この国でいちばん美しいのはだれ？」

すると鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。
けれども、いくつもの山をこえた、
七人のこびとのところにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

おきさきは、これをきくときぎょうてんして、血がみんな頭にのぼってしまいました。なにしろ、白雪姫がまたまた生き返ったことが、わかったからです。おきさきは、あのむすめを殺すにはどうしたものかと、また考えました。そして、毒のくしをつくりました。それから、変装して、この前とはまったくべつのも、まづしい女のすがたになりました。

おきさきはでかけていって、七つの山をこえて、こ

けれども、白雪姫はいいました。
「わたしは、だれもうちのなかへいれてはいけないことになってるの」

すると、行商人の女は、くしをとりだしました。白雪姫は、くしがぴかぴか光っているのを見て、それに、その行商人はぜんぜん知らない人だったので、戸口をあけ、そのくしを買いました。

「おいで、わたしがあんたの髪をくしけずってあげよう」と、行商人の女はいいました。けれども、くしが白雪姫の髪のにさざるやいなや、白雪姫はたおれて死んでしまいました。

びとの家へいき、戸口をたたいていいました。
「いい品を売りにきたよ！ 買わないかい！」
白雪姫は窓から顔をだしていいました。
「わたしは、だれもうちのなかへいれてはいけないことになってるの」

けれども、年とった女はいいました。
「まあ、この美しいくしを見てごらん」
そして、毒のくしをだして、白雪姫に見せました。白雪姫は、そのくしがすっかり気に入入り、ついだまされて、戸口をあけてやりました。

白雪姫が、そのくしを買うと、年とった女がいいました。
「じゃ、ひとつ、わたしがあんたの髪をくしけずってあげよう」

白雪姫はすこしもうたがいません。年とった女は、くしを白雪姫の髪に毛深くさしました。すると、たちまち、毒がはげしくきいて、白雪姫はたおれて死んでし

「さあ、いつまでも、そこで寝てもらおう」と、女王はいいました。そして、女王は心がかかるくなり、帰っていきました。

ところが、こびとたちが、ちょうどよいときに帰ってきました。そして、なにおきたのを見ると、毒のくしを髪の毛からぬきとりました。すると、白雪姫は、目をあけて、また生き返りました。そして、こびとたちに、もうけっして、だれもうちのなかへいれないと約束しました。

女王は、また鏡の前に立ちました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しい女はだれ！」

鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、七人のこびとのところにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

女王は、このことをまたきくと、いかりのために、からだをふるわせました。

「白雪姫は、なんとしても殺してやる。たとえ、わたしの命にかけても！」

それから女王は、秘密の部屋へはいつていき、だれもこさせないようにして、強い強い毒のりんごをつくりました。外から見ると、それはきれいな、赤いりんごで、だれでもそのりんごを見ると、ほしくなるようになりんごでした。

まいました。

「さあ、いつまでも、そこで寝てもらおう」おきさきはそういつて、帰っていきました。

ところが、さいわいなことに、まもなく夕方になって、七人のこびとがうちへ帰ってきました。そして、白雪姫が床にたおれているのを見ると、こびとたちはすぐに、あのわるいおきさきが、また白雪姫を殺そうとしたのだと思いました。そして、あちこちさがして、毒のくしを見つけました。そのくしをぬきとってやると、白雪姫は、気がつき、きょうのできごとを話してきかせました。それをきくと、こびとたちは、用心深くするように、そして、だれにもとびらをあけてやらないようにと、もう一度注意しました。

おきさきは、お城につくと、また鏡の前へいつていきました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しいのはだれ？」

すると鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、いくつもの山をこえた、

七人のこびとのところにいる

白雪姫は、

あなたより千倍も美しい！」

このことをきくと、おきさきはいかりのために、からだをふるわせていました。

「白雪姫は、なんとしても殺してやる。たとえ、わたしの命にかけても！」

それからおきさきは、だれもはいつてこない、秘密のさびしい小部屋へはいつて、強い強い毒のりんごをつくりました。外から見ると、それは赤くて、きれいなりんごで、だれでもそのりんごを見ると、ほしくなるようになりんごでした。けれども、ひときれでもそれ

それから、女王は、お百姓の女に変装して、こびとの家の前へいき、とびらをたたきました。

白雪姫は、顔をだしていいました。

「わたしは、だれもいれてあげられないの。こびとたちにつきつく禁じられているもので」

「そうかい。ほしくなけりゃ」と、お百姓の女はいいました。

「無理強いはしないよ。ただ、りんごをぜんぶかたづけてしまいたくてね。ほれ、ひとつためしに、おまえさんあげるよ」

「いいえ、いりません。わたしは、なにをもらってもいけないの。こびとたちが、もらってはいけないって」

「おまえさんは、きつとこわがってるんだね。それなら、

わたしが、りんごをふたつに切って、半分を食べよう。このきれいな赤いほうを、おまえさんあげるよ」

ところが、このりんごは、とてもじょうずにできていて、赤いほうにだけ毒がはいっていたのです。白雪姫は、お百姓のおばさんが、自分でもりんごを半分食べるのを見て、どうしても食べてみたいと思いました。それでとうとう、のこりの半分を窓からわたしてもらい、がぶりとかじりました。ところが、ひとくち食べると、床にたおれて死んでしまいました。

女王はよろこんでお城へ帰り、鏡にたずねました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しい女はだれ？」

を食べようものなら、たちまち死んでしまうのです。

りんごができあがると、おきさきは、顔に色をぬり、お百姓の女に変装して、七つの山をこえて、こびとの家へいき、とびらをたたきました。

白雪姫は、窓から顔をだしていいました。

「わたしは、だれもいれてあげられないの。こびとたちに禁じられているもので」

「そうかい。ほしくなけりゃ」と、お百姓の女は答えました。

「それでいいんだよ。ただ、りんごをぜんぶかたづけてしまいたくてね。ほれ、ひとつ、あんたにあげるよ」

「いいえ、いりません」と、白雪姫は答えました。

「わたしは、なにをもらってもいけないの」

「おや、あんたは、きつと、毒でもありやしないかと

こわがってるんだね。あんたはこの赤いほうを食べ。わたしが白いほうを食べるから」と、年とったお百姓の女がいいました。

ところが、このりんごは、とてもじょうずにできていて、赤いほうにだけ毒がはいっていたのです。白雪姫は、この美しいりんごを見て、食べてみたいと思いました。そして、お百姓のおばさんが、りんごを半分食べるのを見ると、もうがまんできなくなつて、手をのばして、りんごをうけとりました。ところが、ひとくち食べると、床にたおれて死んでしまいました。

これを見ると、おきさきがいいました。

「こんどこそ、だれにもおまえを起こすことはできないぞ」

そして、お城へ帰り、鏡にたずねました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しいのはだれ？」

すると、鏡が答えました。

「女王さま、

この国でいちばん美しいかたは、あなたです」

「これで、おちついた」と、女王はいいました。

「わたしが、またこの国でいちばん美しい女になつたんなら、白雪姫は、こんどこそ生き返らないだろう」

こびとたちが、夕方になって、鉱山からうちへ帰ってみると、かわいい白雪姫が、床にたおれて死んでいました。こびとたちは、白雪姫のひもをゆるめてみたり、髪の毛になにか毒のものがささっていないかと見てみました。けれども、なんの役にもたちません。こびとたちは、白雪姫を生き返らせることはできませんでした。

こびとたちは、白雪姫をたんかに乗せて、七人がみんな、そのたんかにすがって、三日間というもの泣きに

泣きました。それから、こびとたちは、白雪姫を土に埋めようと思いました。けれども、白雪姫は、まだ生きいきとしていて、ぜんぜん死人のようには見えなし、それに、あいかわらず美しい赤いほおをしていました。

それで、こびとたちは、ガラスのひつぎをつくらせ、白雪姫をそのなかにいれて、外から白雪姫を見ることができるようにし、また、その上に金文字で、名前とその生い立ちを書きつけました。そして、だれかひとりが毎日家にのこって、見はり番をすることにしました。

白雪姫はそうやって、長い長いあいだ、ひつぎのなかによこたわっていました。それでも、ちっともくさらず、いつまでたっても雪のように白く、血のように

すると鏡が、やっとこう答えました。

「女王さま、

この国でいちばん美しいのは、あなたです」

これで、おきさきのねたま心は、やっとおさまりました。なんとか一応は、おさまったのです。

夕方になって、こびとたちがうちへ帰ってみると、白雪姫が床にたおれていました。もう、すこしも息をしていません。死んでいます。こびとたちは、白雪姫をだきあげて、なにか毒のものがささないかと、さがしてみました。コルセットのひももゆるめてみました。髪の毛もくしけずってみました。からだを水とワインとで洗ってもみしました。けれども、なんの役にもたちません。かわいい白雪姫は、死んでしまい、生き返りませんでした。

こびとたちは、白雪姫をたんかに乗せて、七人がみんな、そのたんかにすがって泣きました。三日間とい

うもの泣きつづけました。それから、こびとたちは、白雪姫を土に埋めようと思いました。けれども、まるで生きている人間のように、生きいきとしていて、ほおは、まだ美しく赤いので、こびとたちはいいました。「この人を、あの黒い土のなかに埋めることはとてもできない」

こびとたちは、外から白雪姫を見ることができるようになり、ガラスのひつぎをつくらせ、白雪姫をそのなかにいれて、その上に金文字で、名前と、それが王女であることを書きつけました。それから、ひつぎを、山の上にかつぎあげて、だれかひとりがいつもそここのこって、見はり番をすることにしました。動物たちもやってきて、白雪姫のために泣きました。まず最初に、ふくろうがきました。それからからすがきて、最後に鳩がきました。

さて、白雪姫はそうやって、長い長いあいだ、ひつぎのなかによこたわっていました。それでも、ちっともくさらず、まるで、生きてねむっているように見え

赤く、そして、もし目をあけることができたなら、その目は黒檀のように黒かったことでしょう。なぜなら、白雪姫は、まるでねむっているようによこたわっていたからです。

あるとき、ひとりのわかいプリンスが、こびとの小屋へやってきて、泊めてもらおうとしました。そして、プリンスが部屋へはいって見ると、白雪姫がガラスのひつぎのなかによこたわっており、七つの小さなあかりが白雪姫をきれいに照らしていました。すると、プリンスは、美しい白雪姫をいくら見ても見あきませんでした。そして、金文字で書かれた名前を読み、それが王女であるとわかりました。それで、プリンスは、こびとたちに、死んだ白雪姫がはいっているひつぎを売ってくれないか、とたのみました。けれども、こびとたちは、どんなにお金をくれても売ってくれません、といいました。

すると、プリンスは、こびとたちにこうたのみました。白雪姫をほくに贈り物にしてくれないか。ぼくは、

白雪姫を見ないでは、もう生きていかれない。そして、白雪姫を、この世でぼくの最愛のものとして、たいせつにし、あがめます。

それで、こびとたちは同情して、プリンスにひつぎをくれました。プリンスは、ひつぎを自分の城へかっいでいかせました。

そして、そのひつぎを自分の部屋に置かせ、一日じゅうそのわきにすわって、目をはなすことができませんでした。でかけなければならなくて、白雪姫を見ることできないと、プリンスは悲しくなっていました。そして、ひつぎがそばにないと、ひとくちも食べることができませんでした。

ところが、いつもひつぎをかつぎまわらなければならぬ召使いたちは、腹をたてていました。そしてあるとき、ひとりがひつぎをあげ、白雪姫を持ちあげていました。

ました。いつまでたっても雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪をしていました。

あるとき、ひとりの王子が、森のなかへまよいこみ、ひと晩泊めてもらうため、こびとの小屋へやってきました。王子は、山の上にあるひつぎと、そのなかに寝ている白雪姫を見て、金文字でそこに書かれていますと読みました。そして、こびとたちにいいました。「このひつぎをほくにくれませんか。そのかわり、あなたたちがほしいものは、なんでもあげるから」けれども、こびとたちは答えませんでした。「世の中のあらゆる金をくれたって、これをあげるわけにはいきません」

すると、王子がいました。

「それでは、ひつぎをほくに贈り物にしてくれないか。

ぼくは、白雪姫を見ないでは、もう生きていかれない。ぼくは、白雪姫を、ぼくの最愛のものとして、あがめ、たいせつにします」

王子がそういうと、やさしいこびとたちは王子に同情して、ひつぎをくれました。それで、王子は、召使いたちのかたに、ひつぎをかつがせて、歩きはじめました。

すると、召使いたちが、やぶに足をとられてよろめきました。そのひょうしに、白雪姫が飲みこんでいた、毒のりんごのひときれが、のどからとびだしました。そして、白雪姫は生き返り、身を起こしました。

「こんな死んだむすめのおかげで、おれたちは一日じゅうこき使われるんだ」

そして、白雪姫のせなかをにぎりこぶしでなぐりました。すると、白雪姫が飲みこんでいた、おそろしいりんごのひとときが、のどからとびだして、白雪姫は生き返りました。

それで、白雪姫は、プリンスのところへいきました。プリンスは、愛する白雪姫が生き返ったので、うれしくて、どうしたらいいのかわかりませんでした。ふたりは、いっしょに食卓にすわって、楽しく食事をしました。

つぎの日、結婚式がおこなわれました。

そして、白雪姫のわるい母親も、招待されました。その朝、女王は鏡の前に立っていました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しい女はだれ！」

すると、鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、わかい女王は、

あなたより千倍も美しい！」

女王はこれをきくと、ぎょうてんして、とてもとても心配で、口ではいえないほど不安になりました。けれども、ねたみ心かられて、どうしても、結婚式でそのわかい女王を見たいと思いました。

いってみると、わかい女王とは、あの白雪姫だとい

白雪姫はいました。

「まあ、たいへん、わたしどこにいるのかしら」
けれども、王子は、大よろこびしていました。

「きみは、ぼくのそばにいるんだよ」

そして、白雪姫にこれまでのことを話してきかせました。

「ぼくは、世界じゅうのなによりもきみのことが好きだ。いっしょに、父の城にきてくれ。そして、ぼくの妻になってくれ」

白雪姫も王子のことが気に入って、いっしょにいき、結婚式が、きらびやかに、盛大に準備されました。

結婚式のお祝いには、白雪姫のまま母も、招待されました。おきさきは、美しいドレスを着ると、鏡の前へいっていいました。

「鏡よ鏡、かべの鏡。

この国でいちばん美しいのはだれ？」

すると、鏡が答えました。

「女王さま、

ここでいちばん美しいのは、あなたです。

けれども、わかい女王は、

あなたより千倍も美しい！」

わるいおきさきはこれをきくと、ぎょうてんして、とてもとても心配で、口ではいえないほど不安になりました。ほんとうは、結婚式なんかには、いきたくなかったのですが、ねたみ心かられて、どうしても、そのわかい女王を見たいと思いました。

広間へはいってみると、わかい女王とは、あの白

うことがわかりました。ここでは、鉄の上履きが、火のなかでまっかになっていました。女王は、その上履きを履かされ、それを履いておどらされました。女王の足は、ひどくやけどをしましたが、たおれて死ぬまで、ダンスをやめることは、ゆるされませんでした。

初版
第2版

雪姫にほかならないことがわかり、おどろきのあまり、動けなくなっていました。けれども、そのときにはすでに、鉄の上履きが炭火の上におかれていて、それがまっかになると、広間に運びこまれました。そして、わるいおきさは、まっかに焼けた上履きを履かされ、それを履いておどらされました。おきさきの足は、ひどくやけどをしましたが、たおれて死ぬまで、ダンスをやめることは、ゆるされませんでした。

ハッセンプフルーク家とズイーベルト

C O L U M N

グリムのメモは「ハッセンプフルーク家とズイーベルト」となっています。初版のテクストは、ハッセンプフルーク家のおそらくマリーの話と、シュヴァルム地方トライザのフェルディナント・ズイーベルト（一七九一一八四七）の話が合成されたものです。ズイーベルトによるのは、結末部の白雪姫が生き返る場面です。この場面は、第二版を準備する際に、ハインリヒ・レーオポルト・シュタインが提供した話によって変更されました。ですから、初版と二版のテクストの最も大きな違いは、白雪姫の生き返り方ということになります。

白雪姫を殺そうとするのは、初版では実母ですが、二版から継母になります。そして、この継母の悪さが強調されるような加筆もなされています。たとえば、継母は白雪姫を殺したとき、ひものときは「この美人もこれでおわりさ」「りんごのときは」「こんどこそ、だれにもおまえを起こすことはできな

いぞ」という捨てぜりふを吐きます。

初版の白雪姫は、発端部で「黒檀のように黒かったの」といわれますが、何が黒いのかわかりません。黒い目だとわかるのは、結末近くになってからです。ガラスの棺に長いあいだよこたわっている場面に、「もし目をあけることができたなら、その目は黒檀のように黒かったことでしょう」とあります。しかし、これには無理があるとグリムも思ったのでしよう。二版からは発端部で「黒檀のように黒い髪をしていたので」と変えています。

簡潔な初版のテクストに手が入られ、二版で膨らむ傾向はここでも認められます。その際、登場人物の行為の理由が説明されるようになります。たとえば、白雪姫がこびとたちのものを順に飲み食いする場面には、「ひとつのおさからだけとって、それをかっらっぽにしてしまいなくなかったから」「こびとたちが闖入者に気づく場面には、「小屋のなかのようすが、朝

でていったときとちがっていたから」という文が挿入されています。

りんごのひとときれがのどからとびだして白雪姫が生き返るのは、初版と二版に共通していますが、そのきっかけが異なります。

ズイーベルトによる初版では、プリンスのために棺をかつぎまわらなければならぬ召使いが腹をたて、白雪姫の背中をなぐります。白雪姫が生き返ると、プリンスは嬉しくて、どうしたらいいかわからず、白雪姫と楽しく食事をします。これは、一般に普及している、王子のキスで生き返るものとは全く趣が違います。怒る召使いとプリンスの人間らしい姿が語られていて、おもしろいと思います。

シュタインによる二版では、棺をかついだ召使いたちがやぶに足をとられてよるめき、白雪姫は生き返ります。王子は大喜びして、白雪姫に求婚します。そして、この生き返り方が二版以降もずっと保たれます。